

太田村・幣山記念碑ノート

—茨木市域における天覧軍事演習と顕彰—

西 島 太 郎

About the Oda-Heizan Memorial Monuments in Ibaraki City, Osaka Prefecture, built in April 1888

NISHIJIMA Taro

はじめに

明治天皇が行った地方視察（巡幸・行幸）は九十七回^①に及び、とくに明治五年（一八七二）から同十八年にかけて大規模なものが六回あった（六大巡幸）。この巡幸の意義を、田中彰は「支配の正当性」と「仁恵深い君徳を備えた存在であることを民衆に浸透させる」「国家的プロパガンダ」であるとし、遠山茂樹は四回の巡幸は天皇が「民情を知り、民の生活の苦しみを問う」ことを標榜して行われたとした^②。原武史は、明治から昭和にかけての天皇の巡幸・行幸を検討し、巡幸・行幸の意味を「臣民」の間に天皇や皇室の存在を認識させ、忠誠心を培養するための重要な政

治手段とみなされ、「天皇が全国を回る」ことで、「全国の人々に、天皇の存在を知らしめ、天皇の生身の身体を各地で見せることで権威を確立させて」いったとする。そして一八九〇年以降の行幸は軍事行幸が中心で、鉄道での演習地往復のみとなり、天皇の実像は民衆に見えなくなっていくとする^③。

地方視察を目的とする行幸の最後となるのが、明治二十年（一八八七）二月の近畿・東海地方の訪問であった。この時、明治天皇は京都・大阪に行幸を行うが、その際、大阪府島下郡宿久^{しゅくく}庄^{しょう}・福井^{ふくい}・道祖本^{みちのぼ}・安威^{あゐ}・耳原^{みみのはら}・太田各村（大阪府茨木市）で陸軍の野外軍事演習が行われた。この演習は耳原村の幣久良山^{へいさ}（幣山）と太田村の二か所で明治天皇の天覧があった。地域の住民らはこれを栄誉に思い、各天覧場所に記念碑を建造した。

羽賀祥二は、「記念碑はその前に立つ人々に、いま立っている歴史的な位置を確認させていく作用を持」ち、それは「遺蹟をとまりまく風景の中で実感」されるものだとする。^⑤このことは、幣久良山と太田村に建つ二つの記念碑に対峙する時、碑文を読み解き、建造理由を知り、時代状況を確認し、碑が建つ風景の中で実感しながら理解すべきことを示している。

また中野良によれば、軍による野外軍事演習は、「武装集団としての軍隊が地域社会にやってくる」ことで、「演習は具体的な戦闘行為を地域住民に公開する行事」であった。^⑥茨木地域と軍事演習との関りについても見ていく必要がある。茨木の地域住民は、軍隊による演習と天覧をどのように受け止め、記念碑建造へと至るのだろうか。

本稿は、明治二十年の茨木地域で行われた天覧軍事演習の詳細、および演習を契機に建造された二つの記念碑と住民との関わりについて明らかにし、この記念碑がもつ歴史的な意味を考えたい。

第一章 太田村・幣山記念碑に関する研究史

まず太田村と幣久良山の記念碑に関する研究状況をみておく。両記念碑は明治二十年（一八八七）二月十六日の天覧軍事演習（「天覧軍事運動」）を契機としているが、この天覧軍事演習については、大正十年（一九二一）に市立大阪市民博物館が編纂した

『明治天皇大阪行幸誌』^⑦が詳しい。前年十一月に明治神宮が建つたのを機に、明治天皇の大阪市への行幸資料を蒐集し、同館で陳列し展覧することで「皇徳追慕の資」とするためであった。^⑧神宮造成と同時期に二十日間、約二百点が展示された。大阪府の三島郡役所からは、「手幣山御覧所記念碑」写真が陳列された。『明治天皇大阪行幸誌』には、巻頭写真と共に碑文（表面のみ）を掲載し、「官報」「大阪府行幸啓一件書類」「朝日新聞」「第四師団記録」を掲出して、行幸啓および天覧軍事演習の関連資料を掲出する。

次いで、一九二八年（昭和三）刊行の『大阪府史蹟名勝天然記念物』第二冊は、三島郡（旧島上・島下両郡）を担当した天坊幸彦が両碑の表面文字を記録している。しかし、知事が選定した篆額や裏面の文字は全て割愛している。^⑩その後、一九六九年刊行の『茨木市史』^⑪にも両碑は触れられることなく、一九九八年刊行の『茨木の史跡』^⑫で「天皇御野立所」として紹介されている。^⑬

二〇〇〇年代に入り、新たな茨木市史編纂事業として二〇〇四年三月に刊行された『新修茨木市史史料集7 新聞にみる茨木の近代I——三島地域新聞記事集成』^⑭は、『朝日新聞』のみであるが、天覧軍事演習および記念碑建造時の記事を収載し、これに基づき同年八月に遠藤俊六が「新聞にみる地域の二八〇年代——コレラ・天皇・軍隊・アヘン」^⑮で天覧軍事演習の概略をまとめ、同演習の一か月後に行われた参謀旅行演習（図上演習）についても紹介している。

二〇〇九年には大阪府茨木市にある追手門学院大学においても、大阪偕行社附属小学校（追手門学院の前身）の設置に尽力した今井兼利が天覧軍事演習の指揮官となっていたことを把握し、『明治天皇大阪行幸誌』等の関係部分を集めた内部資料を作成している。¹⁶⁾

そして二〇一六年に『新修茨木市史』第三巻、通史Ⅲの第一章第一節「明治維新と地域の村々」（高木博志執筆）や第二章第五節「明治期の社会と文化」（黒岩康博執筆）において、天覧軍事演習および太田村・幣久良山の記念碑について触れているが概略にとどまっている。

以上、明治二十年の天覧軍事演習および太田村・幣久良山の記念碑の研究史をみてきた。演習については、『明治天皇大阪行幸誌』および『朝日新聞』記事から復元した遠藤俊六の研究がまとまっているが、概略にとどまっている。

明治二十年時の新聞には、『朝日新聞』の他にもう一社『大阪日報』（毎日新聞）がある。『大阪日報』には独自の記事も多くあり、併用して検討することで、これまで知られていなかった事実が数多く明らかにできる。また、太田村・幣久良山の記念碑については、表面の文面のみ翻刻され、裏面の文字の検討がない。また碑文そのものの検討も行われておらず、どのようなことが書かれているのか、という視点がなかった。記念碑の建造過程を明らかにすることで、明治二十年時の地域住民にとって、記念碑建造がどのような意味をもつものであったのかが明らかになるはずで

ある。

第二章 天覧軍事演習と地域住民

（1）茨木地域と軍事演習

大阪府島下郡道祖本村（茨木市）近辺が、陸軍の軍事演習地として活用されるようになったのは、明治十九年（一八八七）からである。それ以前は、同十八年三月に大阪鎮台の砲兵第四連隊が三重県での砲兵演習の帰途、高槻（高槻市）に止宿し¹⁸⁾（明治十八年三月）、翌十九年九月には、島下郡芥川（高槻市）近傍で大阪鎮台の歩兵第八連隊の士官・曹長など六十余名が「実地対策」を執行し、これに歩兵第七旅団長の今井兼利が「検閲」を行った。宿所や演習地として高槻・芥川近傍が選ばれていた。¹⁹⁾

しかし同年十月二十九日には、大阪鎮台の歩兵第二十連隊が前日午後に島下郡道祖本村と小野原村（箕面市）近傍に入り、野外で陣営を設け（露営）一夜を過ごし、翌日夜明け（払暁）「暁天」と共に軍事演習（「不期対抗運動」）を行った。この演習の「検閲」のために、高島鞆之助中将および今井兼利・岡沢精両少将は午前四時四十五分梅田停車場発の汽車に乗り、茨木を経て現地入りし、午前十時十七分の梅田停車場着の汽車で帰った。²⁰⁾さらに同年十一月三十日には、大阪鎮台の歩兵第八連隊が、午前七時から道祖本村近傍で軍事演習（「不期対抗演習」）を行い、その計画（「方略」）は、第一大隊が敵軍の西軍（兎玉如忠少佐が指揮

官)として防戦に務め、第二・第三両大隊が本軍の東軍(前田隆礼少佐が指揮官)として攻撃する予定であると報道されている。⁽²¹⁾

演習地が西国街道上の芥川から道祖本村・小野原村と西方へと移動し、かつ道祖本村付近での演習が繰り返されていたことがわかる。これらの演習での実績が、翌二十年二月の天覧軍事演習へと繋がったものと考えられる。

(2) 天覧軍事演習に至るまで

明治天皇と皇后の明治二十年の行幸啓(天皇の行幸と皇后の行啓)は、一足先(一月十四日)に皇太后(英照皇太后)が神戸へ着き京都へ入った。これに高島鞆之助中將・今井兼利少将は、奉迎のため神戸へ赴き梅田停車場まで供奉した。⁽²²⁾ また有栖川宮熾仁親王が一月二十日に京都へ向かう途上、梅田停車場に六分間停車した際も、高島中將以下の将校数名・建野郷三大阪府知事等が出迎えた。⁽²³⁾ 高島はその後も天機伺い・御年祭参拝のため京都へ向うき(一月二十八・三十一日)、三十一日に大阪に帰り、大阪鎮台で打ち合わせをし、二月二日にも京都へ出向いている。⁽²⁴⁾

明治天皇と皇后は一月二十五日に東京を發ち、横浜から軍艦浪速で神戸港に着き、次いで京都の御所へと至る。

行幸啓の行程について一月二十日付の『朝日新聞』では、島上郡「芥川近傍」で軍事演習(「不期對抗運動」)の天覧があるとし、その行程は京都から高槻停車場で汽車を下車し、天覧後、茨木停車場から乗車し大阪へ向かう計画を報じていた。二十九日の

同紙には、更に詳しく「芥川近傍」での演習とし、大阪鎮台の歩兵第八・第二十兩連隊、砲兵第四連隊、輜重兵(兵站担当)第四大隊・第一中隊と、姫路宮所の歩兵第十連隊、大津宮所の歩兵第九連隊等との「不期對抗演習」だと報じている。翌三十日の紙面では、京都への還御の途上で、指揮官は「多分」今井少将だろうとする。同日の『大阪日報』でも「芥川村」で演習と報じている。

二月二日の『大阪日報』紙面で行幸啓の順序が報道され、天皇は、七日午前十二時に梅田停車場を發ち、午後一時三十分「茨木近傍の演習地」に着き、同地で昼食、午後四時三十分高槻停車場に着く予定で、皇后も「茨木近傍演習地」へ同行するとのことであった。また演習の指揮官は今井兼利少将、参謀官は土屋光春少佐・草場彦輔大尉と決まったと報じた。⁽²⁵⁾

同日の『朝日新聞』は、天覧演習の詳細を報じている。道祖本村近傍で野外演習があること、指揮官は大阪鎮台歩兵第七旅団長で陸軍少将の今井兼利、参謀官に土屋光春(歩兵少佐)・草場彦輔(歩兵大尉)等で、各隊一人につき空砲三十発、大砲一門につき空砲三十発ずつ用意される予定だとしている。⁽²⁶⁾ また演習の計画(方略)が示された。それによれば、西軍に攻囲された大阪の軍勢に援軍を差し向けるために東軍は先方隊を差し向け、これを知った西軍が一枝隊を派遣して東軍の援軍を妨げる計画であった。東軍は二月六日の夜には太田村(茨木市)まで到達し、近傍の要地を占領した。西軍の斥候(偵察隊)も小野原・栗生(箕面市)

まで来ていた。⁽²⁷⁾この演習は、大阪鎮台・姫路営所・大津営所の歩兵の「混成」部隊による点に特徴がある。

二月三日に宮内大臣の伊藤博文が大坂府知事の建野郷三に伝えた「大坂へ行幸行啓御発着割」には、天皇の茨木での行程は、二月七日午後十二時十五分に梅田停車場を發ち、同時四十分には茨木停車場に着き、馬で演習場へ向かい、午後一時三十分には「手幣山^{（茨木山）}御覽所」へ着き、午後三時三十分には「太田村御覽所」、四時三十分には高槻停車場を發つ計画となっていた。⁽²⁸⁾

しかし翌四日、天皇が「風氣」のため大坂行幸啓は延期となる旨が大坂府知事へ伝えられた。翌五日正午の新聞号外で、天皇が「風氣」のために臨幸延引と報道された。結局十一日に、十五日の出立が宮内大臣から大坂府知事へ伝えられ、十五日の当日に「官報」でも「大阪鎮台へ 臨幸、偕行社へ御一泊、翌十六日茨木近傍ニ於て演習 天覽アラセラル、旨」と詳細が報じられた。⁽²⁹⁾

耳原村幣久良山（手幣山）と太田村の両天覽所は、二月七日に完成した。天覽所は三間×二間（五・四三×三・六二メートル）で、一間四方（一・八一×一・八一メートル）の御茶所と二間×一間（三・六二×一・八一メートル）の御厠が、それぞれ一棟建てられた。また茨木と高槻の各停車場にも、各御厠一棟が建てられた。演習天覽中、皇后は高槻停車場で休憩するため、停車場東側に休憩所一棟が新築された。これらの建物は全て檜材が用いられた。⁽³⁰⁾

十日には、軍事演習の軍事上の機密を漏らした者がいたため、

演習方法を変更したと『大阪日報』は報じている。

大阪への行幸啓の前日（十四日）、姫路営所（歩兵第十連隊）・大津分営（歩兵第九連隊）の各兵が、天覽軍事演習に参加するため大阪に到着し、東区上寺町の各寺院へ宿泊した。⁽³¹⁾同日、姫路営所司令官の岡沢精少将が、大阪の師団本部で演習の打ち合わせをした。⁽³²⁾

（3）天覽軍事演習の実際

十五日の大坂行幸は、大阪鎮台のある大阪偕行社が天皇の行在所^{ざいしよ}となった。鎮台司令官で陸軍中将の高島綱之助が案内した。天皇は午後に第三高等中学校に行き、皇后は住吉神社を訪れ、大阪偕行社に入り、能楽、夜に花火天覽となった。

この日、神戸停泊中の各軍艦の艦長も演習地へ向かった。高島中将・今井少将も、十六日の午前十一時六分梅田停車場発の汽車で茨木の演習地へ向かった。⁽³³⁾

演習の前日（十五日）夜十時に、指揮官今井兼利が「仮設敵兵」の東軍へ出した「教令」では、東軍の任務は本軍来着までの守勢が任務で、第一防御線・第二防御線を選定し、第二防御線を拠点とすること、西軍は本道（西国街道）から攻撃するが、右翼の攻撃が中心となること、敵が右翼に脅迫した場合、第一防御線を捨てることなどの指示がなされている。後の東軍の陣形をみると、第一防御線は八幡山（将軍山⁽³⁴⁾）―幣久良山（第一天覽所）―上野村の南北線にあたり、第二防御線は稲荷山（太田山・第二天

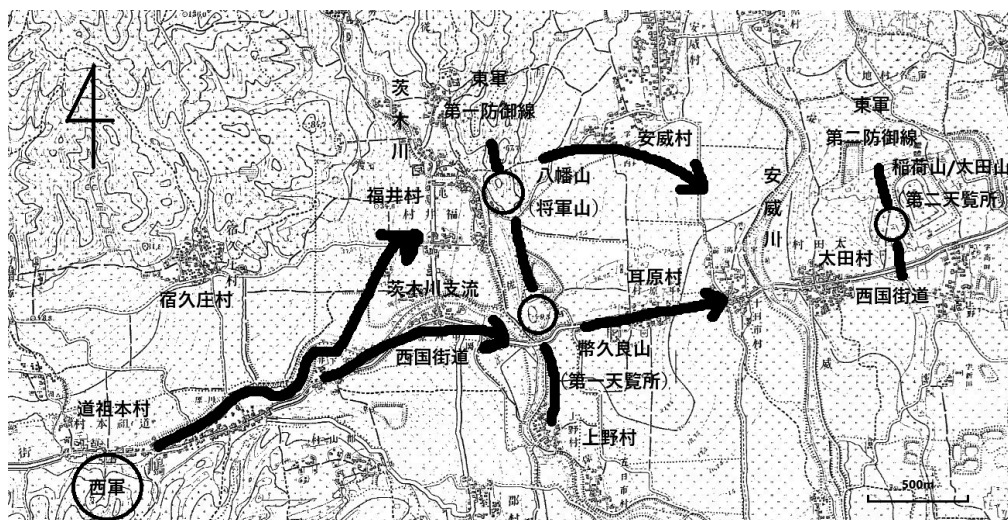


図 明治20年2月16日の天覧軍事演習概略図

※原図は大日本帝國陸地測量部 2万分1迅速図・仮製図「茨木村」1885年(明治18)測量 1893年(明治26)製版を用い縮尺。

覧所)に当たると判断される。

十六日の演習当日、午前九時に指揮官の今井兼利が牧落村の西軍へ出した「教令」では、前衛・本軍・後衛・大行李(食糧・衣料等を運ぶ部隊)の編成や、前衛歩兵の前方二キロ先に多数の斥候を出して、前方の地の搜索を命じ、今井自身は西軍本体の先頭にいるので報告するよう伝えている³⁵⁾。

この日の天皇は、午前八時に行在所(大阪偕行社)を出て、大阪砲兵工廠を巡覧し、一旦行在所へ戻り、十一時から大阪府尋常師範学校、次いで梅田停車場へ向かった。皇后は泉布観(応接所)、造幣局、大阪府高等女学校を訪れ梅田停車場へ至った。午後零時十五分に天皇・皇后とも、汽車で梅田停車場を發ち、同時四十分に茨木停車場に着いた。茨木停車場では天皇のみ降車した。島上・島下郡長の廣瀬直激が書記を従え、同停車場で天皇を出迎えた。天皇はすぐに乗馬し(馬名「芳野」、倍賀村・上穂積村・郡村・中河原村(以上、茨木市)を経て、午後一時六分に耳原村幣久良山(「手幣山」)の第一御覽所に着いた³⁶⁾。

これに供奉した者は、有栖川熾仁親王・北白川能久親王・徳大寺実則侍従長・三条実美内大臣・伊藤博文宮内大臣・高島駒之助中将・建野郷三大阪府知事・北垣国道京都府知事・山口正定宮内書記官、広幡忠朝・堀河康隆・坊城俊章・片岡利和の侍従などであった³⁷⁾。

軍事演習は、天皇が第一天覧所(幣久良山)へ到着すると同時に開始された。この場所は、東軍が八幡山(將軍山)―幣久良山

表 1 茨木での天覧軍事演習の推移 (明治 20 年 2 月)

日時	西軍		東軍 (敵)	
	朝日新聞	大阪日報	朝日新聞	大阪日報
15 日夜			一枝隊、太田村着。近傍の要地を占領。小野原・道祖本村方面へ向かおうとする	
16 日 9:00	枝隊、牧落村 (箕面市) に達する			
13:06	演習開始			
	本道 (西国街道) から東軍を攻撃	道祖本村小丘の半腹に屯す 通路確保のため茨木川堤防をまず攻撃を試みる 山麓より茨木川支流 (勝尾寺川) 堤防の敷中を潜行 途中より一手は福井村の方へ 一手は右へ分かれて攻撃 砲兵は道祖本村小丘半腹から時々山砲を発し応援	耳原村字手幣山の第一戦線を占領 物見隊も発砲にて応戦 東軍の右翼は宿久庄東村方面 (福井村方面) から敵兵多く現れ、支えきれず退却 第二戦線の高田村 (太田村東隣) まで退き拠点とする	上野村茨木川堤防 (天覧所の近傍) に一枝隊 小銃放ち、西軍に占拠を知らせる 天覧所の北方の八幡山 (將軍山) から大砲を發し声援 一枝隊のため死傷者多く出る 負傷者を担架で宮田村 (高槻市。太田村隣地) の仮設の陸軍病院へ送る 利あらず徐々に退却 稲荷山 (太田村) まで引き揚げ、胸壁を築き、太田村の西国街道へ地雷火を伏せ、西軍の來襲を待つ 安威 (八幡山・將軍山) にいた本軍も到来
14:25	天皇、第一天覧所 (幣久山) を發つ			
14:55	天皇、第二天覧所 (太田村) に到着			
	砲兵、本道 (西国街道) の通る耳原村を占領 本軍の砲兵、八幡山 (將軍山) の西端に爆裂薬を敷き爆發させる 宿久庄東村から出撃歩兵の二大隊も進撃して安威村の要地を占領 東軍を正面および右翼 (左翼か) から包囲 安威川の堤防を占領	東軍の八幡山 (將軍山) の砲臺を占拠。大砲四門を略奪	設置していた地雷火を連続爆破させ、後方へ退く	八幡山の東軍は逃れ、枝隊に合流
	勝敗決し、打ち止めのラッパで演習終了			
	太田村に集合整列して陛下奉送の礼式を行う			天皇、仮設病院で医官等の治療実況を見学
15:40	第二天覧所 (太田村) を出発			

出典 『大阪日報』明治 21 年 2 月 17 日付「對抗演習天覧」、18 日付「對抗演習天覧の景況」。『朝日新聞』明治 21 年 2 月 18 日付「天覧の對抗演習」。

―上野村へと南北に展開する東軍の第一防御線と、西国街道との交差点にあたる。天皇は、どのように西軍が攻めてくるかという東軍陣中の視点から演習を眺めたことになる。

実際に天皇が見た風景は次のようなものであった⁽³⁸⁾(午後一時六分開始)。東軍が天覧所南の上野村の茨木川堤防に配置した一兵隊は、時々小銃を放つも、西軍がすでに要所を占領している事実を知る。西軍は、西方の道祖本村の小丘中腹にいて、山崎(大山崎)の占拠を目指す、すでに東軍によって茨木川堤防が占拠され、通路が塞がれていた。そのため西軍は、まずこれを攻撃して通路を開き、その後、山崎(大山崎)を目指すこととした。しかし道祖本村の山麓から茨木川堤防までの間は、一面田野で正面から進む場合、東軍に狙撃される場合を恐れ、山麓から茨木川支流(勝尾寺川)の堤防の藪中を潜行して、途中二手に分かれ、一つは左(北方)の福井村の方へ、もう一つは右(南方の西国街道)へ分かれて東軍を攻撃した。西軍の砲兵は道祖本村の小丘中腹に残って、時々山砲を発射して応援した。東軍も第一天覧所北方にある八幡山(將軍山)から大砲を発射して援護した。砲声は天地が崩れるばかりのものであった。

東軍はわずか一枝隊であつたため勝ち目はなく、西軍はますます破竹の勢いで、攻撃も差し迫つたものとなり、多くの死傷者が出た。そこで天皇のいる場所のすぐ近く、最も見やすい場所へ控えていた看護卒等が負傷者を担架に乗せて、宮田村(高槻市宮田町。西国街道沿いにある)に仮設した陸軍病院へ運んだが、その

様子は極めて速く巧みであつた。

東軍はますます不利となり徐々に退き、敵を誘い出して要所を占拠しようと計画し、継体天皇陵(太田茶臼山古墳)の近くの稲荷山(茨木市太田。太田神社のある太田山)まで引き揚げ、そこで工兵は胸壁(背の低い壁面)を築いた。また西国街道が通る太田村に地雷を設置して、西軍の来襲を待った。安威(八幡山・將軍山)にいた東軍本隊(「本軍」)も到達して合流したことで、兵たちは奮起した。

この時の時刻は、二時二十五分。天皇は第二天覧所(幣久良山)を発ち、供奉の者と共に愛馬「芳野」で西国街道を東行し、同五十五分に太田村字稲荷山(太田山)にある第二天覧所に着いた。この場所は、東軍の第二防御線にあたる。

西軍の砲兵は、西国街道(「本道」)の通る耳原村を占領し、八幡山(將軍山)の西端に爆裂薬を敷いて爆発させた。西軍は勝利に乗じて鬨(とどろ)の声をあげ、東軍の八幡山(將軍山)の砲壘を乗とり、大砲四門を略奪した。八幡山(將軍山)を守る東軍は逃れ、枝隊と合流した。宿久庄東村(福井方面)から出撃した西軍の歩兵二大隊も進撃して、八幡山のある安威村の要地を占領した。さらに西軍が安威川の堤防を占領したことで、東軍は退却せざるを得ず、事前に設置した地雷(「地雷火」)を爆発させて後方へ退いた。大砲による応援も効果無く、ここに勝敗は決し演習は終わった。天皇は、仮設病院で医官などの施療の実況などを見学し、午後三時四十分には第二天覧所を出発した。西国街道を東行し、宮田

村・氷室村・郡家村・芥川駅を経て高槻停車場へ至った。⁽³⁹⁾

皇后は、午後一時五十分に高槻停車場に着き、花火・曲芸・玉乗り・田舎踊・富田踊等の催しを觀て天皇を待つていた。高槻停車場に着いた天皇は、しばらく休息をとり、午後四時三十分⁽⁴⁰⁾に皇后と共に汽車で京都へ向かった。そして京都を二十二日に発ち、同日名古屋に泊り、翌二十三日に愛知県知多郡長尾山で陸海軍對抗演習を天覽し、軍艦で横浜まで船中泊して翌二十四日に東京に帰った。

天皇の演習天覽に同行していた陸軍中将の高島鞆之助と大阪府知事の建野郷三は、高槻停車場から京都へ天皇に供奉したが、両者とも翌十七日の午前八時に大阪に帰っている。⁽⁴¹⁾十七日の午後は、両者と両者の夫人が主催する天皇臨幸の祝宴（能舞台での能、食堂での立食、花火打ち上げ）⁽⁴²⁾が大阪偕行社で催された。

(4) 地域住民の関り

『大阪日報』明治二十年一月二十三日付「大阪臬聞」によれば、島下郡福井村（茨木市福井）の「豪農」高木半^{なかば}（一八二七—一九一三頃）が、天皇の大阪駐蹕^{ちゅううれん}中に能・狂言を天覽に供したい旨を大阪府庁へ出願した。大阪府庁は京都府にある「御巡幸掛」へ願書を提出した。高木家は江戸時代に高槻藩から郷士・代官格となつた家で、半自身は安威村の疎水を開いて船による輸送を試みた地元の名士である。島上・島下両郡の代表として大阪府會議員も務めた。また新能楽を数多く編纂した能楽改正論者で、明治十三

年（一八八〇）時にはすでにその持論を持つていた。大西鑑一郎の素人弟子で觀世宗家と交流を持った。同十九年に老齡を理由に職を辞した。同二十一年に『板敷山』を刊行し、「関西の觀世流で准所演曲扱い」となった。⁽⁴³⁾半の願書は認められなかったよう⁽⁴⁴⁾で、大阪偕行社内に新築された能舞台での実際の上演は、師匠の大西鑑一郎がその一人に選ばれている。⁽⁴⁵⁾隠居後の時期は不明ながら、新能楽を論じた「能楽評論」を半は宮内庁へ献納し天覽となつた。

一月下旬には、天皇が通る道路の修繕を、大阪府庁から各郡役所へ伝えられていた。⁽⁴⁶⁾二月七日に予定されている「茨木地方」の天覽軍事演習で、天皇が通る道路を修繕するため、二日に西成郡役所土木課の者が派遣され、四日に終了した。⁽⁴⁷⁾四日には大阪府行幸啓掛の数人が茨木へ出向いたが、同日正午に天皇の京都出立日延引が報じられた。また太田村での演習天覽の際は、場所が狭いため（地所の狹隘）⁽⁴⁸⁾人々が自由に見ることが禁じられる筈だと新聞は報じている。

十六日の演習当日、多くの人が見学に行こうとして、梅田停車場は非常に混み合い、茨木停車場では現地の人々が「麗しき天顔を拝せん」として、停車場より道筋などに「充満」した。この混雑を、大阪から出張してきた三百余人の警部・巡查が制御した。停車場から第一天覽所（幣久良山）までの道筋には、松樹を並べて植え、人々は両側に並んで出迎えた。しかし天皇の供奉する官吏が少なく、誰一人、天皇だと思ひ拝した者はいなかった。

「今のは先払いで天子様は後からお出でになる」と通過後も立ち並んで待っていたのである。⁽⁵⁰⁾

天覧演習の際に天皇が用いる水（「御料水」）は、「茨木第一天覧所」（幣久良山）は、「島下郡西上野村字釜谷ト唱野井戸」が用いられた。「全第二天覧所」（太田村字稲荷山）では、「同太田村高田寺田善五郎井水」を使うこととなっていた。⁽⁵¹⁾ 太田村の高田地区の寺田家の井水で、寺田善五郎は後に太田村記念碑発起人の一人となっている。

この日、大阪の第三高等中学校（前年設立）、尋常師範・中学の両校、平安学校等の生徒数百人が、福井村の山上から見学した。とくに尋常師範学校の生徒四十人は戎装（軍装）だった。⁽⁵²⁾

天皇が通る高槻停車場直前の芥川町（高槻市）の両端には、緑門が設けられ、数千の球灯が吊るされた。皇后が待機する高槻停車場では、慰撫するために数百発の花火を打ち上げ、町内十二歳前後の少女百余人が白色の裾模様のそろいの衣装を着て盆踊りをし、また現地有志の者により小澤秀寿の球乗芸が披露された。市中は国旗を掲げ、日章の提灯を吊るし、大阪市中と変わらなかった。また天皇が去った後も、昼夜謳歌して万歳で祝した。⁽⁵³⁾

第三章 太田村・幣山記念碑の建造

（1）立て続けの軍事演習地

天覧演習から一か月後の三月十六・十七両日、大阪鎮台の歩兵

第二十連隊の第一大隊が小野原村、第二大隊が道祖本村で夜営し、近傍の適地で軍事演習（「不期対抗運動」）が行われる予定であると新聞報道があった。⁽⁵⁴⁾ また四月七日から十二日まで、茨木小学校を「仮講堂」として、御雇外国人メッケル少佐率いる陸軍の「参謀旅行演習」が行われた。これは実際の部隊を動かさない図上演習であった。⁽⁵⁵⁾ メッケル少佐は、陸軍の軍制をフランス式からプロシア式への改変に携わった人物である。

これら陸軍の演習が、天覧軍事演習を挟み立て続けに茨木地方で計画・実行されたのである。

（2）建碑への動き

現在、茨木市太田には、西国街道の雲見坂途中を北へ折れて入る太田神社参道途中（稲荷山・茶白山・宮の前）に太田村記念碑（茨木市太田三丁目一二）がある。高さ三メートル六八・五センチ、幅一メートル二六センチ、厚さ中央二〇センチ、下部一四センチで、表面中央に縦一メートル五〇センチ、幅六〇センチの掘り込んだ面に文字が刻まれている。裏面には断裁面に直接文字が刻まれている。住宅地の一角にあり、柵が設けられていて柵内に入らなければ裏面を見ることはできない。

天覧軍事演習から二か月半後に作成された「御天覧所碑石寄付人名簿」（史料1）からは、記念碑設置の動きが明らかとなる。

【史料1】御天覧所碑石寄付人名簿⁽⁵⁶⁾

（表紙）「明治二十年第五月／第拾号／御天覧所／碑石寄附人

名簿／島下郡太田村（印）「撰津国／嶋下郡／太田村」

太田村記念碑

田野前開、郊原後擁、太田之邑、地勢要衝、兵以可用也、明治式拾年式月十六日、車駕西幸、親閱兵於此、對抗有法、旌旗整肅、天顏有喜、咫尺之間、邑人得拜之、茲銘石而、永顯其址、銘曰

桓桓部伍 如貔如虎 言末耀武 肅肅金鼓
 亟民維撫 安此九土 德遍卒普 神武復古

明治丁亥五月 日柳政愬 謹撰

島下郡太田村

字太田山エ明治式拾年式月十六日

聖上御臨幸之際、第式演習御天覽所ト相成リ、村民幸榮是ニ過ギン、依テ今般広ク有志ヲ募リ、其地碑石ヲ設置シ、永々後世ニ伝ヘント欲ス、諸君幸ニ此之意ヲ諒シ、相当之献金アラシム事希望ス矣、

右者有發起人

明治式拾年第五月

吉田勘右衛門
 北川与左衛門（印）
 齋藤半兵衛（印）
 中村文五郎（印）
 平野治兵衛（印）
 太田善左衛門（印）

北川綱太郎（印）
 北川平左衛門（印）
 西村兵二郎（印）
 齊藤徳松（印）
 三島清七（印）

石碑建立の發起人の一人である齋藤半兵衛家に残された史料で、豎帳の表紙に「撰津国／嶋下郡／太田村」の印が捺してあり、發起人を中心に村として作成された。文字は二丁表まで残り四丁分が白紙であり、發起人の追加を想定した作りとなっている。

前半が、後に記念碑表面に刻まれる日柳政愬（三舟・一八三九～一九〇三）の文章で、後半が發起人らの署名および建碑趣旨である。前半の文章は、記念碑表面の文章と同一であり、すでに明治二十年五月の寄付を呼びかける段階で出来上がっていた。日柳政愬は教育者であり、その父燕石は讃岐（香川県）の勤皇博徒で漢詩人でもあった。政愬は少年期から詩を作り、明治二年に高松で兵部史生、同五年に大坂府大属となり、学務課長を務めた。数十の学校を創設し、同十二年に大阪師範学校校長を兼ねるが翌年辞職した。その後、盲啞学校愛育社を創り、また「浪速文会」を設立し教科書の改訂を行った。大阪の桃谷（大阪市生野区）に居住し、詩を詠み書物を著した⁵⁷⁾。寄付人名簿の文章は、政愬四十九歳時のもので、發起人が建碑を想定して依頼したものと考えられる。寄付人の呼びかけにあたり、發起人達は用意周到に準備して

いたことがわかる。

政惣が書いた前半部分の意味は、以下の様になる。

太田村の記念碑。前方に田野が開かれ、後方に原野を擁する太田村の地勢は要衝の地であり、軍事演習を行うことができる。明治二十年二月十六日に明治天皇は西方へ赴かれ、親しくこの地で閲兵された。対抗軍事演習は手本となるもので、旗は整い厳かである。天皇の顔には喜びがあり、拝謁の時間に村人は天皇に拝謁した。ここに石に銘文を刻み、永遠にその址を顕彰する。銘文は以下のとおり。

強く勇ましい部隊は、猛獣の貌ゆづのようであり、虎のようでもある。古くからの続く武威を輝かし、戦陣で用いる陣鉦じんがねと陣太鼓は厳かである。万民をなだめ、全土は安泰であり、天皇の徳があまねく行きわたる。これは神武天皇の創業の始めに立ち返る復古である。

政惣は、太田村の地勢は要衝で軍事演習の場としてふさわしく、演習は手本となるもので、その演習を天覧されたこと、村民は明治天皇に拝謁を許され、その天皇の顔には喜びがあったこと、碑文を作り、その場所を永遠に顕彰することを記し、そのような天皇の行動は、その徳を行き渡らせる、神武天皇の創業の始まりに立ち返る復古だと評した。

発起人の十一名は皆、現在も太田地区に名字が見える家名で、

太田村の住人を主にして建碑が計画された。寄付の呼びかけ段階では「五月」としているが、実際の碑面は「八月」となっている。明治二十年五月時点の発起人は十一人であるが、実際の碑面では十八人であるので、最終的に発起人が十八人になった時点が八月だったと考えられる。発起人の最初の名前のある吉田勘右衛門は、太田村・耳原村を含む近隣六か村（河原・西河原・耳原・太田・三島・郡の各村）の戸長（注）で、幣山記念碑の発起人の一人でもあることから、建碑運動の中心人物であったと考えられる。次に、寄付人名簿後半の発起人達による寄付呼びかけの文意は、次の様になる。

太田山へ、明治二十年二月十六日に明治天皇が臨幸され、第貳演習天覧所となり、太田村民は光栄である。よって今、広く有志を募ってその場に石碑を設置し、永く後世に伝えたい。その意味を理解し献金を希望する。

建碑は、幣久良山に続いて二つ目の演習天覧所となったことは、「村民幸榮是二過ギン」として、有志を募り、同地に石碑を設置して後世に伝えようとするものであった。

（3）太田村記念碑

では実際の碑文をみることにする。碑文は石碑の表裏に次のように記す。

【史料2】太田村紀念碑文

(表面)

〔和風扇物〕
〔上部横書〕

太田村紀念碑

田野前開、郊原後擁、太田之邑、地勢要衝、兵可以用也、明治二十年二月十六日、車駕西幸、親閱兵於此、對抗有法、旌旗整肅、天顏有喜、咫尺之間、邑人得拜之、茲銘石而、永顯其址、

銘曰

桓桓部伍

如貔如虎

言來耀武

肅肅金鼓

烝民維撫

安此九土

德遍率普

神武復古

明治二十年歲在丁亥八月

日柳政愬謹撰

大阪府知事從四位建野郷三篆額

山田孝三郎拜書

(裏面)

(一・二段目)

建碑賛成

司令官陸軍中將子爵

高島軻之助

旅団長陸軍少將

今井兼利

岡沢精

参謀長陸軍大佐

明治廿一年四月廿日

山根信成

連隊長陸軍中佐

(義芳)
矢上芳義

伊瀬地好成

島上郡長廣瀬直激

元全郡長白石純治

警部 佐野之行

全 稻山小長男

(三・四段目)

發起

有志

吉田勘右工門

長屋景章

西田善五郎

好田吉右工門

虎谷幾三郎

阪田吉郎

北川与左工門

中村新三郎

中村文五郎

田宮仁兵衛

北川平左工門

好田幸助

平野治兵衛

宮崎重治郎

西村兵治郎

大西利三郎

齋藤半兵衛

鶉野恭治郎

齋藤德松

三宅知道

中村德兵衛

建部喜平

北川九右工門

石田米吉

太田善左工門

石田与一郎

寺田善五郎

新宮德兵工

三島清七

地主

中村惣七

北川綱太郎

吉井又兵衛

石工

太田得成書

島利助

表面の日柳政惣の文章は、前年五月の「碑石寄附人名簿」作成段階のものと同じである。日付が五月から八月になっている点は前に述べた。

その他、上部横書きの「和風扇物」は、大阪府知事の建野郷三による篆額である。「和風扇物」は、「和風、物を扇ぐ」と読む。日本の現存最古の漢詩集『懷風藻』（七五一年成立。撰者未詳）に藤原総前が詠んだ「侍宴」（宴に侍る）の一節に「斜暉照蘭麗和風扇物新」（斜暉蘭を照らして麗わしく、和風物を扇いで新し）とあり、この一節を引用したものと考えられる。「和風」は「和やかなそよ風」、「扇物」は「物を揺れ動かす」の意なので、文意は「和やかなそよ風が物を揺れ動かす」となる。

碑表面の書を揮毫した「山田孝三郎」は、菱湖流と呼ばれた端正で明快な書風の書家である巻菱湖（一七七七—一八四三）の指導を受けた、越後の原脩斎の門人である。孝三郎は原脩斎墓碑の文字を揮毫している。⁽⁶⁰⁾

碑文表面には、教育者で詩文に優れた日柳政惣、書家巻菱湖の流れをくむ山田孝三郎、篆書体で大阪府知事選定の語句を記すことで格調高いものしている。

表面に対して裏面には、「建碑賛成」「発起」「有志」「地主」「石工」ら四十五人の名が刻まれている。

「建碑賛成」は、天覧軍事演習に関わった人たちで、司令官陸軍中将の高島駒之助を筆頭に、演習の指揮を執った旅団長陸軍少将の今井兼利（歩兵第七旅団長⁽⁶¹⁾）に岡沢精（歩兵第八旅団長・姫路営所司令官）、参謀長の山根信成（大阪鎮台参謀部参謀長）、連隊長の矢上義芳（歩兵第八旅団歩兵第二十連隊長）・伊瀬地好成（歩兵第七旅団歩兵第八連隊長）、島上・下郡長、元同郡長、警部（佐野は天王寺警察署長。稲山は茨木警察署長⁽⁶²⁾）ら十人である。

発起人は吉田勘右衛門を含め十七人であるが、「地主」に分類される北川綱太郎も、前年五月の発起人名簿（「御天覧所碑寄付人名簿」）に発起人の一人になっているので計十八人となる。地主を含めた発起人十八人は、耳原村の虎谷を除き、みな太田地区にその家名が現在でも見つけることができる。「有志人」は十四人である。うち長屋景章・中村新三郎・大西利三郎の三人は幣山記念碑の発起人となっており、幣山記念碑の発起人の三人が太田村記念碑では有志人として参加したことが分かる。

裏面の揮毫者の太田得成は不明である。

石碑を造った「石工 島利助」は、大阪城下の石工が多くいた西横堀の「樋口屋」を屋号にもつ「利助」と考えられる。⁽⁶³⁾「島」は明治以降の名字とみられる。「樋口屋」は江戸時代後期から見え、造立した狍犬の形式からは、備前国からの目新しい型を取り入れた新興派と呼ばれる一派で、「デッサン」も技巧もしっかりし

写真 1 太田村記念碑



表面



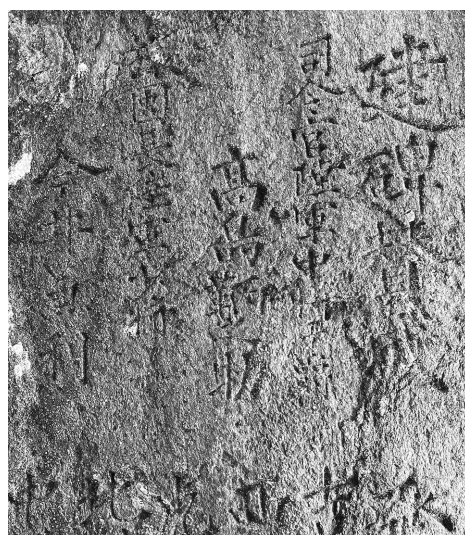
側面



裏面 文字部分



表面 篆額および山田孝三郎の文字



裏面 太田得成の文字

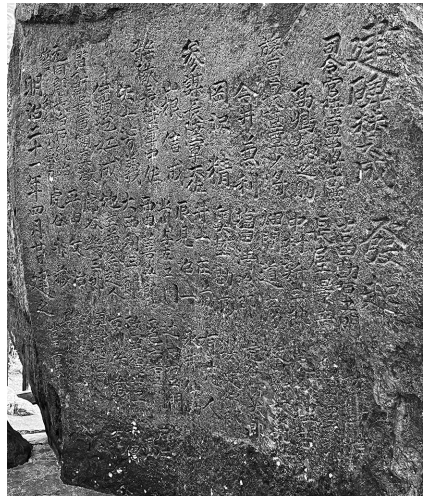
写真 2 幣山記念碑



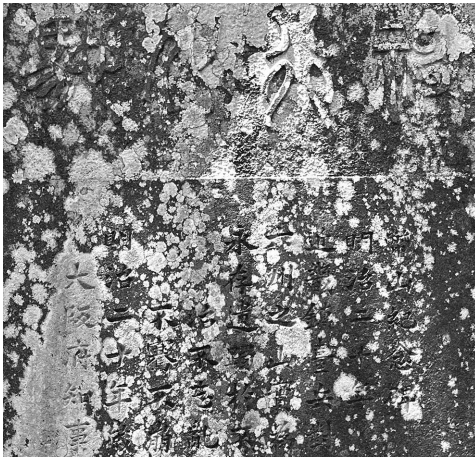
表面



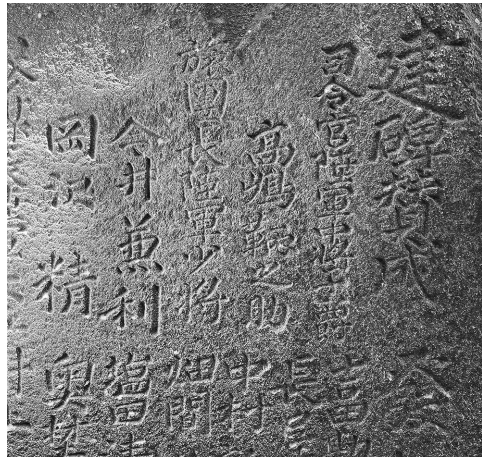
側面



裏面 文字部分



表面 篆額および山田孝三郎の文字



裏面 吉田重太郎の文字

表 2 建碑関係者一覧

太田村記念碑		幣山記念碑	
(表面) (3人)		(表面) (3人)	
撰者	日柳政愨	撰者	日柳政愨
篆額	建野郷三	篆額	建野郷三
書	山田孝三郎	書	山田孝三郎
(裏面) (44人)		(裏面) (40人)	
建碑賛成 (10人)	高島柄之助	建碑賛成 (9人)	高嶋柄之助
	今井兼利		今井兼利
	岡沢精		岡沢精
	山根信成		山根信成
	矢上芳義		矢上芳義
	伊瀬地好成		伊瀬地好成
	廣瀬直激		廣瀬直激
	白石純治		白石純治
	佐野之行		稲山小長男
	稲山小長男		
発起 (17人)	吉田勘右エ門	発起 (11人)	吉田勘右エ門
	西田善五郎		長屋景章
	虎谷幾三郎		中村新三郎
	北川与左エ門		畑間道彦
	中村文五郎		塩田清次郎
	北川平左エ門		奥埜勘藏
	平野治兵衛		井上庄藏
	西村兵治郎		辰見治一
	齋藤半兵衛		北川与左エ門
	齋藤徳松		西田善五郎
	中村徳兵衛		大西利三郎
	北川九右エ門	地主兼発起人 (9人)	虎谷幾三郎
	太田善左エ門		平田文治
	寺田善五郎		虎谷弁藏
	三島清七		小林勘治
	中村惣七		久保田重太郎
	吉井又兵衛		虎谷理吉
有志 (14人)	長屋景章		波田野安次郎
	好田吉右エ門		虎谷宙太郎
	阪田吉郎		小林定次郎
	中村新三郎	有志人 (8人)	永井仙助
	田宮仁兵衛		辻忠右エ門
	好田幸助		一色市右エ門
	宮崎重治郎		政岡徳兵エ
	大西利三郎		市川竹藏
	鶯野恭治郎		奥野徳右エ門
	三宅知道		野口好太郎
	建部喜平		長沢次郎
	石田米吉	書	吉田重太郎
	石田与一郎		島利介
	新宮徳兵エ	石工	森川伊介
地主	北川綱太郎	手伝	
書	太田得成		
石工	島利助		

※ゴシック体は太田村記念碑・幣山記念碑の双方記載者。
下線は「御天覧所碑寄付人名簿」記載者。

ている」と評価される石工であった。⁽⁶⁵⁾
日付は明治二十一年四月二十日で、実際の建碑式は一月月遅れの五月二十七日だった。

(4) 幣山記念碑

次に幣久良山の頂(第一天覧所)に設置された「幣山記念碑」(茨木市耳原三丁目耳原公園内)についてみる。碑の大きさは、高さ三メートル一センチ、幅一メートル五一センチ(下部の最大部)、厚さ二五センチ(最も薄い部分で一二センチ)で、表面中央に縦一メートル五〇センチ、幅六〇センチの掘り込んだ面に文字が刻まれている。裏面の下部には断裁面に直接文字が刻まれて

いる。現在、柵が設けられている。

碑文は次のように刻まれている。

【史料3】幣山記念碑文

(表面)

「上部欄書」
「神行化馳」

幣山記念碑

明治二十年 車駕西幸、二月十六日駐蹕于此地、親覽

近畿鎮台兵對抗運動、此地西北負山、東南沃野相連、可下瞰

六州之山、実為用兵之要地矣、地之父老榮之、相謀作碑、銘以

永存、遺蹟於不朽、銘曰、

治不忘乱

相地閱兵

我武維揚

威震八紘

不^ふ蹶^{そく}不^ふ崩^{ぼう} 斯山斯岡 聖寿万年 永思無疆

明治二十年歲在丁亥八月 日柳政惣謹撰

大阪府知事從四位建野郷三篆額 山田孝三郎拝書

(裏面)

建碑賛成 發起

司令官陸軍中將子爵 吉田勘右ヱ門 小林勘治

高嶋⁽⁶⁵⁾ 軻之助 長屋景章 久保田重太郎

旅団長陸軍少將 中村新三郎 虎谷理吉

今井兼利 畑間道彦 波田野安次郎

岡沢精 塩田清次郎 虎谷宙太郎

參謀長陸軍大佐 奥埜勘藏 小林定次郎

山根信成 井上庄藏 有志人

連隊長陸軍中佐 辰見治一 永井仙助

矢上芳義^(義芳) 北川与左ヱ門 辻忠右ヱ門

伊瀬地好成 西田善五郎 一色市右ヱ門 石工

島^上郡長廣瀬直激 大西利三郎 政岡徳兵エ 島利介

元同郡長白石純治 地主兼發起人 市川竹藏 手伝

警部 稻山小長男 虎谷幾三郎 奥野徳右ヱ門 森川伊介

平田文治 野口好太郎

虎谷弁藏 長沢大次郎

明治二十一年四月廿日建之 吉田重太郎書

表面は明治二十年八月付の日柳政惣の文章であることから、太

田村紀念碑と同じく寄付金募集段階で作られていたものと考えられる。

上部の篆額は、太田村紀念碑と同じく大阪府知事の建野郷三のもので、こちらは「神行化馳」と刻んでいる。この篆書「神行化馳」は、後漢の崔駰^(さいいん)(?~九二年)が元和二年(八五年)に編纂した『北巡頌』の一節「垂拱^{すいきやう}穆穆^{もくもく}、神行化馳^{かち}」による。「垂拱穆穆」は「天下が良く治まり平穩である」という意味で、「神行」は「天子の行幸」、「化馳」は「徳化が速やかに及ぶ」ことである。⁽⁶⁶⁾ 幣山紀念碑の場合、「明治天皇の行幸が、その徳を人々に広めた」となる。

碑文を揮毫したのは、太田村紀念碑と同じく山田孝三郎である。

日柳政惣が作成した碑文の意味は、以下ようになる。

明治二十年に明治天皇は西方へ赴かれ、この地に一時止まり、近畿鎮台兵の軍事演習(「對抗運動」)を御覧になられた。この地の西北には山があり、東南には肥沃な田野が連なる。(近畿六州の山を俯瞰できる。実に演習にふさわしい要地である。土地の老人は榮譽なことであるので、碑を作る計画を立て、銘文により永く伝え、その足跡を遺す。銘文は以下のとおり。

世の中が良く治まって平和な時でも、常に乱世になった時を考えて準備しておく。⁽⁶⁷⁾ 相応の地で閔兵する。わが武

威は発揚し、国の隅々まで震わす。欠けることなく崩れることなく、この山この岡、天子の長寿を願ひ、永遠を思う。

政懇は、この地が軍事演習にふさわしい地であること、演習の天覧があったこと、「土地の老人は榮譽なこと」だとして碑を建て、銘文により永く伝えその足跡を残すこと、平和な時でも常に世が乱れた時を考え準備すること、そして天皇の長寿を願う文章を寄せている。

裏面には、「建碑賛成」「発起」「地主兼発起人」「有志人」「石工」ら四十人の名が刻まれている。

「建碑賛成」は、天覧軍事演習に関わった司令官陸軍中将の高島鞆之助を筆頭に、演習の指揮を執った旅団長陸軍少将の今井兼利に岡沢精、参謀長、連隊長、島上・下郡長、元同郡長、警部ら九人である。太田村記念碑記載の警部佐野之行（天王寺警察署長）の名が無い。

発起人は吉田勘右衛門を含め十一人であるが、「地主兼発起人」の九人を併せると二十名となる。地主は平田を除き、みな耳原地区に現在でもその家名を見つけることができる。地主以外の発起人十一名のうち三名（吉田勘右衛門・中村新三郎・辰見治一）が戸長という立場で、太田村の発起人（吉田・北川・西田）以外、奥野（上野）・井上（耳原・辰見（中河原）が現在でもその家名を見つけることができる。しかしその他は不明であり、太田村の

発起人や幣久良山の地主が中心となっている。有志人八人は、記念碑のある耳原の隣の上野に辻・奥野の家名が現在でも見つけることができ、現在の豊中市原田にあたる原田村や「丹州」（丹後か丹波）住人など遠方の者も建碑に参加している点に特徴がある。幣山記念碑の場合、地主や戸長が中心で、太田村記念碑のように発起人の所在地がまとまっていない。両碑の建碑式は太田村から行われていることから（後述）、建碑を主導したのは太田村の発起人達であったと考えらえる。

また、裏面の揮毫者「吉田重太郎」も不明である。名字からは、発起人の吉田勘右衛門の有縁者の可能性がある。同様に太田村記念碑の裏面揮毫者「太田得成」も発起人に太田利三郎がいて、発起人の有縁者の可能性が高い。そのため裏面の揮毫は、地元の発起人有縁者によるものと推察される。石工についても島利助に「手伝」森川伊介の名が刻まれている。島利助を「島利介」と刻んでいるのは、手伝の森川伊介が「伊介」の「介」を使い「利介」と刻んだためと考えられる。実際の製作面でも、太田記念碑は島利助が製作し、幣山記念碑は手伝森井も関わっていて、石工も太田記念碑に力を入れていることが推察される。

（5）建碑式の模様

太田村・幣山記念碑は、太田村・耳原村を含む近隣六か村（河原・西河原・耳原・太田・三島・郡の各村）の戸長だった吉田勘右衛門を中心に、各村の有志者や地主らと共に建造された。

五月二十四日に有志者惣代は大阪府庁へ上申し、記念碑が竣工したこと、および建碑式が執り行われること、この式場に知事・書記官の臨席を乞うた。⁽⁷²⁾そして二十七日に建碑式が行われた。この日は、近村の者はみな仕事を休業し、国旗を掲げて祝意を示した。

第一の式場は太田村「茶臼山」(太田山)だった。参列者は、碑の篆額を草した大阪府知事の建野郷三、大阪府属の前田辰次郎(庶務課長)⁽⁷³⁾、島上・島下郡長の廣瀬直激、元同郡長で東成・住吉郡長の白石純治、郡書記で島上・島下郡選出の大阪府会議員の奇二治郎兵衛、河原・西河原・耳原・太田・三島・郡こむらの各村の有志者、新聞記者などであった。現地では、三島・郡両尋常小学校の生徒が、各々木銃を携えて式場の前に並立した。

なお軍人は式典に参加していない。メッセル少佐の意見により陸軍の編成が改められ、明治二十一年五月十二日に鎮台は廃止され新に師団が設置された。大阪鎮台は第四師団となり、高島鞆之助は五月十四日から第四師団長となっていた。⁽⁷⁴⁾

府知事および発起人の吉田勘右衛門等が文を読んで式典は終わった。その後、耳原村にある幣久良山の式場へ行き、同様の式典を行った。式典が終わると、休憩所で折詰料理が提供された。両所とも餅蒔きや生徒の体操等が行われた。⁽⁷⁵⁾

天覧の順序は幣久良山・太田村の順であるが、建碑式を太田村から始めているのは、太田村の者が主導して建碑に至ったことによると考えられた。

(6) 高島鞆之助の建碑賛成理由

陸軍将校のための親睦団体である大阪偕行社に、附属小学校が開校したのは明治二十一年四月三日(開校式)で、記念碑建造と同じ月である。大阪偕行社附属小学校の「開設者」である高島鞆之助と、偕行社の幹事長で同校「設置者」となった今井兼利による創立であった。開校理由は、幼児教育の重要性と共に、当時、陸軍幼年学校や陸軍士官学校への入学者が少なく、兵を志願する者の減少が、幼児期からの教育が必要であると、高島らは認識していたことによる。また学校設立計画の発表から開校まで、わずか二か月と急であったのは、陸軍省の支援のもと、陸軍の親睦団体の一つで偕行社と対立した月曜会を解散させ、偕行社にまとめるための方策の一つでもあった。⁽⁷⁶⁾

太田村・幣山記念碑の建造は、天皇の聖蹟を遺すというだけでなく、陸軍の軍事演習を地域社会に後世にまで意識し伝えるものでもあった。そのため、軍への関心を永続させるものとして、高島や今井にとっては「建碑賛成」者となる理由の一つとなったと考えられる。

おわりに

本稿では、明治二十年の茨木地域で行われた天覧軍事演習の詳細、および演習を契機に建造された二つの記念碑と住民との関わりについてみてきた。明らかになったことをまとめておく。

茨木地域は、明治十九年から陸軍の軍事演習場として注目され、繰り返し演習が行われたことで、翌二十年に明治天皇による天覧演習へと繋がった。同年の天覧演習は、大阪から京都へ向かう途中の茨木を演習地として計画され、二月十六日に行われた。天皇を迎えるために道路の補修や、軍事演習天覧にあたり幣久良山と太田村に茶所・厠を併設した天覧所が設けられた。

軍事演習の内容は、西軍に攻囲された大阪の軍勢に援軍を差し向けるため東軍が先方隊を差し向け、これを知った西軍が一枝隊を派遣して東軍の援軍を妨げるもので、東軍を敵に想定し、陸軍少将の今井兼利が全体の指揮官となった。茨木停車場を降り立った天皇には、有栖川・北白川の各親王、侍従長（徳大寺実則）・内大臣（三条実美）・宮内大臣（伊藤博文）・陸軍中将（高島鞆之助）・大阪府・京都の両府知事らが供奉した。

天皇が、幣久良山の第一天覧所に到着するとともに演習は始まった。第一天覧所は東軍の八幡山（将軍山）―幣久良山―上野村と南北に展開する東軍の第一防衛線上にあった。道祖本村の西軍は、茨木川堤防を伝って幣久良山直下の西国街道を突破する隊と、北上して八幡山（将軍山）を攻める隊の二手から攻めた。東軍の八幡山（将軍山）と西軍の道祖本村小丘の双方から大砲（空砲）で応戦したが、八幡山を西軍が占拠した。天皇は東軍が第二防衛線としていた太田村の第二天覧所へと乗馬で移動した。東軍は太田村の稲荷山まで戻り陣形を整えたが、西軍が安威川堤防や耳原村を占領したことで勝敗は決し演習は終わった。

天皇の天覧所滞在時間は、第一天覧所が一時間十九分、第二天覧所が四十五分間で、茨木停車場を降り立って高槻停車場を發つまで三時間五十分間の滞在だった。

多くの人々が天皇を一目見ようと詰め掛け、茨木停車場からの道筋の両側に並び出迎えた。また、大阪の第三高等中学校、尋常師範・中学の両校、平安学校等の生徒数百人が、福井村の山上から演習を見学した。行幸に際し、福井村の高木半のように新能楽の天覧を望み願書を出す者もいた。

演習終了後、吉田勘右衛門ら太田村の住人を發起人として建碑の動きがあった。教育者であり漢詩に造詣の深い日柳政愨が執筆した建碑趣旨は、太田村の地勢は要衝で軍事演習の場としてふさわしく、演習は手本となるもので、その演習を天覧された。村民は明治天皇に拝謁を許され、その天皇の顔には喜びがあった。碑文を作り、その場所を永遠に顕彰すると記した。日柳は、天皇の徳を広める、神武天皇の創業の始まりに立ち返る復古だと評した。

五月に「御天覧所碑石寄付人名簿」が作成され、建碑に向けた募金が始まり、八月に發起人の人数が固まったとみられる。第一天覧所となった幣久良山（耳原村）でも建碑の動きがあり、耳原村の複数の地主を中心になされた。幣久良山の碑文に刻まれた日柳政愨の碑文は、この地が軍事演習にふさわしい地であること、演習の天覧があったこと、「土地の老人は榮譽なこと」だとして碑を建て、銘文により永く伝えその足跡を残すのだとする。そし

て、平和な時でも常に世が乱れた時を考え準備することと、天皇の長寿を願う文章を寄せた。太田村記念碑では日柳政翹が、幣山記念碑では大阪府知事が、行幸での天覧が天皇の徳を広めたと述べていた。

両碑とも大阪西横堀の石工島利助（屋号・樋口屋）が製作し、碑の表面は、教育者で詩文に優れた日柳政翹、書家巻菱湖の流れを汲む山田孝三郎、篆書体で大阪府知事選定の語句を刻むことで格調高いものになっている。裏面は、賛同者・発起人・有志者等を記し、揮毫は地元発起人の有縁者であると考えられた。建碑賛成者として大阪鎮台司令官の高島鞆之助や、天覧演習で司令官を務めた今井兼利、大阪府知事・郡長らが名を連ねた。

翌二十一年四月二十日に碑は完成し、その一か月後の五月二十七日に建碑式が執り行われた。大阪府知事以下、郡長、府会議員、発起・有志人のほか、地域の尋常小学校生徒も参加した。

軍事演習地でなかった茨木地域が、要地として認識され、軍事演習地となることで天皇が訪れることとなった。姿を見せた天皇は、その存在を人々に認識させ、その権威を高めたであろうことは、記念碑の建造や碑文からも読み取れる。軍事演習を天皇が観たことで、地域の人々や学校生徒などの若者も軍隊の存在を意識していく。二つの記念碑の前に立ち碑文を読むことで、天皇がいた同じ場所から演習地を眺め、軍事演習と天覧を称え、天皇の徳を慕う、当時の人々の熱気を知ることができる。軍隊のあり方も、国内鎮圧のための鎮台から対外的な師団へと移行する過渡期

にあたった。

茨木地域ではその後、明治四十四年（一九一）十一月二十一日に陸軍の第四師団と第十六師団の軍事演習が三島村（旧太田・耳原・西河原・総持寺等の各村）で行われ、東宮（嘉仁親王^{よしひと}。のちの大正天皇）が八幡（太田村上野）の高地で観戦した。午前六時から七時にかけての演習で、演習を統監した乃木希典大將が現地で講評を行った。⁽⁷⁾ 一年半後の大正二年（一九一三）五月、三島郡の有志が八幡の地に「鶴駕駐蹕記念碑」を建造した。⁽⁸⁾ また、翌三年十一月十五日に耳原周辺で行われた陸軍特別大演習は、大正天皇が総裁となるもので、幣久良山の頂で天覧があった。⁽⁹⁾ 十二年後の一九二六年（昭和二）十一月十五日、「耳原村有志」は幣久良山の天覧所に「大正天皇駐蹕所」碑を建造した。⁽¹⁰⁾ 明治二十年の天覧軍事演習以降、茨木地域では、軍事演習に天皇や皇太子の観覧があると、地元有志を中心に記念碑（記念碑）が建造されたことがわかる。

最後に、陸軍将校のための親睦団体である大阪偕行社に、附属小学校が開校したのは、太田村・幣山記念碑の建碑と同じ年の同じ月であった。この小学校創立者が高島鞆之助と今井兼利である。場所は大阪鎮台のある大阪城北西の大手門前で、一九四〇年（昭和十五）四月には附属中学校も開設された。終戦により大阪偕行社が解散すると、「大阪偕行学園」「大手前学園」と運営団体や校名を変え、一九四七年に「追手門学院」が誕生し、一九七六年に「学校法人追手門学院」となった。大阪城北西の地が手狭と

なり、一九六六年四月に茨木市西安威の將軍山へ移転し、「追手門学院大学」が開学した^⑧。そして二〇一九年には茨木市太田東芝町に総持寺キャンパスが開設された。

安威キャンパスのある安威や、総持寺キャンパスのある太田はともに、高島鞆之助や今井兼利が参加した明治二十年の天覧軍事演習の舞台である。追手門学院の前身である大阪偕行社附属小学校創立者である高島や今井の名を刻む両碑の存在は、学院草創期の社会状況を知るための素材となることを指摘しておきたい。

注

- (1) 長谷川栄子『明治六大巡幸』（熊本出版文化会館、二〇一二年）七頁。
- (2) 田中彰『近代天皇制への道程』（吉川弘文館、一九七九年）二二三・二三四・二三五頁。
- (3) 遠山茂樹『日本近代思想体系2 天皇と華族』（岩波書店、一九八八年）四七〇頁。
- (4) 原武史『可視化された帝国——近代日本の行幸啓——』（みすず書房、二〇〇一年）三六六・三六九・三七〇頁。
- (5) 羽賀祥二『史蹟論——19世紀日本の地域社会と歴史認識——』（名古屋大学出版会、一九九八年）一三頁。
- (6) 中野良『日本陸軍の軍事演習と地域社会』（吉川弘文館、二〇一九年）一四・一五頁。
- (7) 『明治天皇大阪行幸誌』（市立大阪市民博物館編、大阪市役所、一九二一年）。
- (8) 『明治天皇大阪行幸誌』収載、池上四郎（大阪市長）「序」、堀居左五郎（市立大阪市民博物館館長）「序」。
- (9) 『大阪府史蹟名勝天然記念物』第二冊（大阪府学務部、一九二八年）。その後、昭和六年に清文堂から再刊。天坊が調査した三島郡分は、天坊幸彦『三島郡の史蹟と名勝』（私家版、一九六一年）として、弟子の木村武夫が天坊の原稿（原文）で誤植を訂正し刊行された。木村の「あとがき」によれば、大正年間に調査されたものの要約だという。
- (10) 天坊幸彦は各碑文に二行程度の解説を付けている。「太田御野立所」（太田村記念碑）には、「明治二十年二月十六日大演習御親閲のため、御召列車高槻駅に御着、それより西国街道を西へ此地に行幸あらせらる。村民永く其聖跡を伝へんとし翌年茲に碑を建つ」と記し、「幣久良山御野立所」（幣山記念碑）も「明治二十年二月十六日大演習御親閲のため、太田御野立所より、更に此地に行幸あらせらる。村民之を記念して碑を建つ」と記す。ここでは明治天皇が高槻駅から西国街道を通って太田、次いで幣山へと至ったとするが、実際はその逆の順路である。
- (11) 『茨木市史』（茨木市役所、一九六九年）。
- (12) 『茨木の史跡』（茨木市教育委員会、一九九八年）九八頁。
- (13) 同様の紹介は、『わがまち茨木 年代誌編』（茨木市教育委員会編・刊、二〇〇七年）八二頁でも行われている。他に打越孝明『明治天皇の聖蹟を歩く——西日本編』（KADOKAWA、二〇一八年、六〇頁）がある。
- (14) 『新修茨木市史史料集7 新聞にみる茨木の近代I——三島地域新聞記事集成——』（茨木市史編さん室編、茨木市刊、二〇〇四年）。
- (15) 遠藤俊六「新聞にみる地域の一八八〇年代——コレラ・天皇・軍隊・アヘン——」（『新修茨木市史年報』三、二〇〇四年）。
- (16) 『創設者 高島鞆之助関係史料（6）——明治天皇大阪行幸・侍従高島鞆之助・西南戦争別働隊・谷干城との関係——』（学院史資料、將軍山会館・大学事務部、二〇〇九年）。『学校設置者 今井

- 兼利少将関係史料(1)——明治天皇大阪行幸・茨木野外演習・学校設置者・真田山陸軍墓地・大蔵省時代——(同、二〇〇九年)。
- (17) 『新修茨木市史』第三卷、通史Ⅲ(茨木市、二〇一六年)。
- (18) 『朝日新聞』明治十八年三月七日付「砲兵行軍」(「新聞にみる茨木の近代」Ⅰ、二四七)。
- (19) 『朝日新聞』明治十九年九月九日付「実地対策」(「新聞にみる茨木の近代」Ⅰ、三一一)、『大阪日報』明治十九年九月十日付「実地対策下検閲」。
- (20) 以上『朝日新聞』明治十九年十月二十七日付「野外演習」・三十日付「検閲使高島中将」(「新聞にみる茨木の近代」Ⅰ、三一七・三一九)。
- (21) 『朝日新聞』明治十九年十一月三十日付「行軍」(「新聞にみる茨木の近代」Ⅰ、三三三)、『大阪日報』明治十九年十一月三十日付「野外演習」、『大阪日報』同年同日付の記事では、「摂州伊丹近傍へ連隊一泊行軍を為し同地に於いて不期對抗運動を演習する筈」とある。
- (22) 『大阪日報』明治二十年一月十五日付「高島今井両将官」。
- (23) 『大阪日報』明治二十年一月二十二日付「有栖川両殿下」。
- (24) 『大阪日報』明治二十年一月二十九日付「大阪鎮台の準備」、二月一日付「奉迎準備の打合せ」(「高島中将」)。
- (25) 『大阪日報』明治二十年二月二日付「演習司令官」。
- (26) 西軍の歩兵第八連隊には第二大隊・第三大隊に混成歩兵大隊、歩兵第二十連隊には第一大隊・第二大隊、野砲兵混成大隊には第一中隊・第二中隊に輜重兵中隊が混成第七旅団で編成された。東軍は実質三中隊で、歩兵第八連隊第一大隊、山砲兵一中台、工兵一中隊で編成された。
- (27) 『朝日新聞』明治二十年二月二日付「天覧演習」。
- (28) 『大阪府行幸啓一件書類』(『明治天皇大阪行幸誌』二四〇頁)。
- (29) 以上、『明治天皇大阪行幸誌』収載「大阪府行幸啓一件書類」(「官報」)。
- (30) 『大阪日報』明治二十年二月九日付「天覧所落成」。
- (31) 『大阪日報』明治二十年二月十五日付「兵隊到着」、『朝日新聞』同年同日付「天津姫路の兵士」(「新聞にみる茨木の近代」Ⅰ、三五〇)。
- (32) 『大阪日報』明治二十年二月十五日付「岡沢少将」。
- (33) 『大阪日報』明治二十年二月十七日付「将官艦長の出張」。
- (34) 笹川隆平・免山篤『茨木市の文化財』第三号、古墳(茨木市教育委員会・茨木市文化財研究調査会、一九六三年)の口絵写真真に「將軍山はこの地方で八幡山ともいう」とある。
- (35) 以上『朝日新聞』明治二十年二月十八日付「旅団命令甲第一号」(「旅団命令甲第貳号」)。
- (36) 『大阪府行幸啓一件書類』(『明治天皇大阪行幸誌』三〇四頁)、『大阪日報』明治二十年二月十七日付「對抗演習天覧」、『朝日新聞』同年十五日付「行啓之記」(「新聞にみる茨木の近代」Ⅰ、三四九)。
- (37) 『大阪日報』明治二十年二月十八日付、三面「行幸啓彙報」(「供奉の方々ハ、有栖川・北白川両宮、徳大寺侍従長、三条・伊藤両大臣、高島中将、建野・北垣両知事、山口宮内書記官、広幡・堀川・坊城・片岡・米田の五侍従等」)。ただし「大阪府行幸啓一件書類」中の「大阪府行幸啓供奉人名」侍従職に坊城の名はない。
- (38) 演習の実態は、『朝日新聞』と『大阪日報』の記者の取材による報道しかない。両紙の記事内容は一見かみ合わないように見えるが、時系列で一覧にすることで理解できるようになる(表1「茨木での天覧軍事演習の推移(明治20年2月)」)。記事は『朝日新聞』より『大阪日報』が詳細である。以下、本文では両紙を合わせて時系列に記述する。
- (39) 『大阪府行幸啓一件書類』。

- (40) ただし『大阪日報』明治二十年二月十七日付「對抗演習天覧」では、高槻停車場発車時刻を午後四時四十分とする。「官報」・『朝日新聞』は午後四時三十分とする。
- (41) 『大阪日報』明治二十年二月十八日付「高島、建野両氏」。
- (42) 『大阪日報』明治二十年二月十九日付「偕行社祝宴の景況」。
- (43) 以上、中尾薫「能楽の近代化と高木半——その履歴と能楽改良論への能役者の反応をめぐって——」(『待兼山論叢』美学編四七、二〇一三年)。「茨木・福井の歴史」(茨木福井の歴史編纂委員会編・刊、一九九七年)第十二章福井の記念碑。『茨木市史』第三巻、通史Ⅲ、三六一頁。なお明治四十四年十月に建立された「高木資田翁彰徳碑」は、茨木市福井の新屋坐天照御魂神社参道にある。
- (44) 『大阪日報』明治二十年二月三日付「能狂言の番組」、六日付「大阪鎮台の準備」、十一日付「天覧の能楽」。
- (45) 『大阪日報』明治二十年一月二十三日付「行幸啓彙報」。金額は四千円。
- (46) 『大阪日報』明治二十年二月三日付「道路修繕」、四日付「引払と増員」、六日付「道路修繕落成」。
- (47) 『大阪日報』明治二十年二月五日付「行幸啓出張」。
- (48) 『大阪日報』明治二十年二月九日付「縦覧を禁ず」。
- (49) 『大阪日報』明治二十年二月十八日付「停車場の混雑」。
- (50) 『大阪日報』明治二十年二月十八日付「茨木、高槻奉迎送の景況」。
- (51) 「大阪府行幸啓一件書類」(『明治天皇大阪行幸誌』二七七頁)。
- (52) 『大阪日報』明治二十年二月十八日付「對抗演習大覧の景況」。
- (53) 『大阪日報』明治二十年二月十八日付「茨木、高槻奉迎送の景況」。
- (54) 『朝日新聞』明治二十年三月十六日付「行軍」(『新聞にみる茨木の近代』Ⅰ、三五六)。
- (55) 『朝日新聞』明治二十年四月十三・十四・二十日付「山縣内務大臣「参謀旅行演習」「公に奉ずる贈」(『新聞にみる茨木の近代』Ⅰ、三六〇—三六二)。「新修茨木市史」三、二六九頁。遠藤、注(15)論文。
- (56) 「斎藤脩家文書」茨木市文化財資料館架蔵写真。『新修茨木市史』六、史料編、近現代(茨木市、二〇一一年)四六三号に部分翻刻されているが、誤字を修正し全文を翻刻した。
- (57) 『浪速叢書』第十(松越政一郎編、名著出版、一九七八年、一五四頁)「日柳三州墓」墓碑銘。『大阪人物辞典』(三善貞司編、清文堂出版、二〇〇〇年)「日柳三舟」。「明治大正人物事典Ⅱ 文学・芸術・学術篇」(日外アソシエーツ、二〇一一年)「日柳三舟」。
- (58) 『朝日新聞』明治二十一年五月二十九日付「建碑式」(『新聞にみる茨木の近代』Ⅰ、四六四)。「職員録」明治二十一年現在(乙)(内閣官房局、一八八八年、国立国会図書館所蔵)。
- (59) 辰巳正明「懷風藻全注釈 新訂増補版」(花鳥社、二〇二二年)四〇八—四一〇頁。
- (60) 『刈羽郡田跡志全』(名著出版、一九六三年)一六九・一七〇頁。川合吟風「余白録 味閑齋、竹洲、原脩齋」(『高志路』二一〇、一九三六年)。「大辞泉」(増補、小学館、一九九八年)収載「巻菱湖」。
- (61) 括弧内の肩書は『明治二十年職員録』(甲、内閣官報局)による。
- (62) 「職員録」明治二十一年現在(乙)(内閣官房局、一八八八年、国立国会図書館所蔵)。
- (63) 同じ名字の家が多く見られるという意味である。以下同じ。
- (64) 杉本厚典「近世大坂における石工・石商」(『大阪歴史博物館研究紀要』一七、二〇一九年)。飛田範夫「江戸時代の大坂の石屋」(『ランドスケープ研究』六四—五、二〇〇一年)。
- (65) 木村茂「大阪近郊の石製狛犬の研究(第5報)」(『大阪教育大学紀要 第1部門』二六、一九七八年)。茨木市近隣では、箕面市粟生間谷の五字神社の狛犬(明治十五年(一八八二)九月銘)が「大坂／西横堀／石工樋口屋」製作にかかる石造物である。

- (66) 諸橋轍次『大漢和辞典』(巻二、大修館書店、一九五六年、四四〇頁)「化馳」。
- (67) 「治不忘乱」は「おさまれども乱を忘れず」と読む。『易教』繁辞下の孔子の一文「治而不忘乱」に基づく。
- (68) 「我武維揚」は『周書』泰誓中の言葉である。明治十五年(一八八二)一月四日の明治天皇が軍人に対して下した「陸海軍人に賜はりたる勅諭」(軍人勅諭)の前文でも使われている。
- (69) 「威震八紘」は、『蜀志』諸葛亮伝「神武赫然、威震八荒」(『日本国語大辞典』)が基となっている。
- (70) 『詩経』(小雅、天保)に「蹇けず崩れず」の句がある。
- (71) 『職員録』明治二十一年現在(乙)(内閣官房局、一八八八年、国立国会図書館所蔵)。
- (72) 『朝日新聞』明治二十一年五月二十五日付「耳原大田の記念碑」。
- (73) 『職員録』明治二十一年一、九月・職員録改(大阪府)(国立公文書館所蔵)。
- (74) 以上、『明治天皇御伝記史料 明治軍事史』(上、陸軍省編、原書房、一九六六年)明治二十一年条、七六六～七六八頁。明治政府の軍隊のあり方が、藩兵と徴兵軍が混在した鎮台から、徴兵制による国民軍の師団へと変化した。
- (75) 以上、『大阪日報』明治二十一年五月二十五日付「建碑式挙行」。
- (76) 『朝日新聞』同日付「耳原大田の記念碑」、二十九日付「建碑式」(『新聞にみる茨木の近代』Ⅰ、四五八・四六四)。
- (77) 以上、三崎一明「大阪偕行社附属小学校」(追手門学院大学教育研究所紀要)二九、二〇一一年。
- (78) 『大阪毎日新聞』明治四十四年十一月二十一日付「東宮茨木行啓」、同月二十二日付「霜に明たる払曉戦」「鞋脚絆の少年団」。
- (79) 「鶴駕」は皇太子が乗る車、「駐蹕」は天子の行幸途中に一時乗物をとどめることである。現在、碑は女九神社(茨木市東太田三丁目五―三一)境内にある。高さ四メートル四六センチ、幅九五セ

ンチ、厚さ二〇センチである。碑文を掲出しておく。

(表面) 「鶴駕駐蹕記念碑」

陸軍中将正三位勲一等功三級男爵茨木惟昭謹書

(裏面) 「明治四十四年十一月二十一日第四十六」

師団演習于八幡之高地爾時蒙

台覧之処

大正二年五月 三島郡有志者謹建

(79) 演習の詳細は、『新修茨木市史』第三巻、通史Ⅲ(茨木市、二〇一六年)第三章第一節「日露戦争後の町村」(遠藤俊六執筆)が記す。

(80) 「耳原有志」を「発起者」として、三島・福井・安威各村や個人・銀行の「特別寄付」を受けて建造された。大きさは、高さ三メートル九一センチ、幅一メートル六四センチ、厚さ一八・五センチである。建碑に十二年の歳月をかけていることの理由、および碑文の内容については、今後の研究が俟たれる。

(81) 以上、『八十年志』(天野利武編、追手門学院、一九六八年)「追手門学院八十年小史」。

〔付記〕史料閲覧を御許可いただいた斎藤脩様、御協力いただいた茨木市立文化財資料館、茨木市財産活用課・公園緑地課、追手門学院大学学院志研究室に謝意を表します。本稿は、大学における自校学習および大学周辺で行うフィールドワークの素材として活用するために執筆したものである。